

新美南吉記念館だより

NIIMI NANKICHI MEMORIAL MUSEUM NEWS

発行 新美南吉記念館 〒475-0966 愛知県半田市岩滑西町1-10-1 Tel. 0569-26-4888 <http://www.nankichi.gr.jp>

第33回 新美南吉童話賞 入賞者発表!

最優秀賞(文部科学大臣賞)

『雪虫』／小塚翔子さん(北海道網走郡)

○審査員講評／冬を連れて来ると言われているのに冬までは生きられない雪虫が、冬を知ろうとして森の生きものたちに冬のことを尋ねて回るこの物語は、一編の詩を味わうように、美しく、切なく、読む人の心に浸み入ります。物語がしりきれとんぼにならなかったのは、雪虫と雪とが会おうラストのシーンまで、きちんと考えられた構成力の勝利。豊かで、しかも過不足のない文章にも感心させられました。(富安陽子)

新美南吉オマージュ部門大賞

(半田市教育委員会賞)

『悲しみ、買います』／数井美治さん

(千葉県香取郡)

○審査員講評／愛犬を亡くした主人公の心理描写が見事です。こんな思いをするのなら、悲しみをなくしてしまいたいと考えるのも納得できました。最後に「その悲しみがなくちゃ、ぼくはぼくでいられない」という結論にたどり着くくだりは切なく、胸に迫りました。また、「桜の色が、涙でぼやけて、白っぽくにじんだ」「楽しい思い出が太陽であるなら、悲しみはそのあざやかな影」などの文章が美しく、心に残りました。(山本悦子)

第 三十三回新美南吉 童話賞には一八〇 〇点の応募があり、その中から十七編の作品が入賞しました。

自由創作部門から最優秀賞に輝いた小塚翔子さん作「雪虫」は、雪虫という実在する昆虫が主役のお話です。まだ雪を見たことがない雪虫は、秋の森でリス、ワカサギ、オジロワシ、雪兔を訪ねて、冬とはどんなものかを聞いて回ります。彼らが語る冬景色に憧れ、自分も雪に会ってみたいと思った雪虫は、「雪は星の子ども」という雪兔の言葉に従って、夜空を高く高く飛んでいき……。厳しくも美しい自然の営み。それを雪虫の目から、優しく巧みに描いた作品でした。

新美南吉オマージュ部門の大賞となった数井美治さん作「悲しみ、買います」は、「でんでんむしのかなしみ」のオマージュ作品です。春。愛犬のモカを亡くした「ぼく」は、悲しみが癒えずぼうつと過ごしていました。そんな折、あやしい男に「その悲しみ、おれが買ってやろうか」と持

ちかけられます。この悲しみがなくなるならと、ただで悲しみを売ってしまうほど。心は羽のように軽くなりました。けれど、悲しみがなくなるとはどういうことかに気が付いて……。悲しみに向き合い、出したぼくの結論に、思わず頷いてしまうお話をした。

どちらも記念館ホームページで公開していますので、ぜひご覧ください。



そのほかの入賞者については、次の通りです。

＊

自由創作部門

【一般の部】

▽優秀賞

〈愛知県知事賞〉

「海のイルカ」

白城アン（東京都三鷹市）

〈半田市市長賞〉

「ちやべくりぶどうの木」

茂内希保子（京都府京都市）

▽特別賞

〈ミツカン賞〉

「星に願いを」

山口タオ（東京都練馬区）

〈知多信用金庫賞〉

「牛が一頭」

二条正親（滋賀県草津市）

〈中部電力パワーグリッド株式会社賞〉

「花まる、あげます」

山世孝幸（北海道小樽市）

【中学生の部】

▽優秀賞

〈公益社団法人半田青年会議所賞〉

「えんま大王の夏休み」

稲葉彩乃（千葉県市川市）

▽特別賞

〈半田信用金庫賞〉

「クロさんの傘」

鈴木創太（愛知県知多市）

▽佳作

「夢の博物館」

本田結（大阪府堺市）

【小学生高学年の部】

▽優秀賞

〈審査員奨励賞〉

「お話屋台」

中村紗也（愛知県安城市）

▽佳作

「ネコとニンゲン」

坂田詩花（愛知県半田市）

【小学生低学年の部】

▽優秀賞

〈中日新聞社賞〉

「赤いふではこのねがい」

小林彩野（神奈川県川崎市）

▽佳作

「こんこんぱかつ」

三浦心桜（愛知県安城市）

新美南吉オマージュ部門

▽優秀賞

〈半田市議会議長賞〉

「パイオリン職人と狐」

千葉瑠子（東京都豊島区）

▽特別賞

〈新美南吉顕彰会賞〉

「赤い手ぶくろ」

川戸恵子（三重県鈴鹿市）

▽佳作

「お地蔵様の草鞋」

川嶋風香（愛知県岡崎市）

＊

今年もたくさんのご応募ありがとうございました。

今回の童話賞では、引き続きオマージュ部門の対象となる南吉作品を広げたことで、多種多様な応募がありました。一番多かったのは『ごんぎつね』ですが、「手袋を買いに」「でんでんむしのかなしみ」も人気で、オマージュされた作品は計二十八編にのびりました。

童話賞を機に南吉作品を読み返してみたいという方もいるのではないのでしょうか。

入賞された皆様、おめでとうございます。授賞式は三月五日（土）に半田市民交流センターで開催し、同日、入選作品集『赤いろうそく』を発売予定です。

新美南吉デザインコンテスト 審査中！

来年、南吉は生誕一〇年を迎えます。そのPRのためのロゴとグッズデザインを募集するコンテストを開催しました。

昨年末から受付を開始し、二月十日（木）の締め切りまでに七二三点の応募がありました。内訳はロゴ三九七点、グッズデザイン三二二点、不明一四点です。どちらの部門も幅広い年代から応募があり、職業も学生、会社員、アルバイト、デザイナーと様々で、生誕一〇年への関心の高さが感じられました。

審査会は二月二十二日（火）に、半田市役所で行われました。ずらりと並べた作品の中から、審査員が気になるものをピックアップした後、全員で協議へ。意匠の秀逸さはもちろん、ロゴの場合は縮小に耐えられるかということや、グッズの場合、どの層をターゲットとして捉えているかなどを話し合い、受賞作を決定しました。

今回のコンテストについて、審査員の高北幸矢先生（清須市はるみ美術館館長）



南吉とわたし ②3 俳優 間瀬 富未子



新美南吉さんとの出会いは、生誕80周年・没後50周年記念ミュージカル「ごんぎつね」でした。彼の名作の数々をつづったその作品は、1993年に初演され好評を博し、1995年の再演時には、南吉さんの出身地である半田で開幕。その日は当時7歳の私にとって、忘れられない1日となりました。

この作品の中で、「明日」という詩を歌うシーンがあり、私が所属していた半田少年少女合唱団の子供達が、一緒に参加し歌う事になったのです。初めて間近でみる、プロの役者達。出番に向けて、楽屋廊下から舞台袖に向かって歩いていく「ごん」の後姿を、今でも、鮮明に覚えています。翌日から、我が家のソファは私のステージとなり、「ごんぎつね」ごっこが連日繰り返されました。

合唱団ではその後も、彼の作品を度々歌いました。中でも、大中恩さんによって作曲された「貝殻」は、強く印象に残っています。朗らかな童謡とは違い、内なる悲しみを表現した静かな楽曲ですが、幼ない私はこの曲を好んで歌っていました。子供にはまだ分からないだろうと妥協せず、奥深い作品を教えていただいた経験は、私の人生に大きく影響を与えたと思います。今後もし子供から大人まで沢山の方にふれていて欲しい名曲です。

10年の時が流れ、成長した私は音楽大学で学びながら、舞台俳優になる夢を叶えることができました。初めての商業演劇デ

ビュー作品で、ミュージカル「ごんぎつね」に出演していた役者の先輩方と共演できた時は、心の底から嬉しかったです！

大学を卒業してからは、ミュージカルスクールや芸能事務所などで、舞台を目指す子供達の指導者としても活動を始めました。出会いや経験に恵まれ、充実した日々を送る中で、突然。——演劇の灯が消えた。止まってしまった私たちの時間とは裏腹に、はじめて使う言葉が、次々に入り込んでくる。三密・ニューノーマル・社会的距離・Zoom・不要不急、不要不急、不要不急……………。

段階的に訪れる悲しいニュースに何度も衝撃を受ける中、ふと目に止まったのが、新美南吉記念館の「#明日をとどける」という企画。南吉さんの詩「明日」を、自分らしいパフォーマンスでツイッターに発信しようというお知らせでした。私は「歌いたい！」の一心で、すぐに作曲にとりかかりました。

7歳の頃歌った思い出の曲。あの頃は、先生方によるご指導のもと、ひとつひとつ音をとり練習をしていましたが、今は自分がイメージした音と声で誰かに届けるまでを、一人で出来る様になったんだな。と、ピアノに向き合いながら感謝の気持ちがあふれました。後日、この映像の撮影をした場所が、南吉さんが上京時代に暮らしていた街であった事を知り、不思議なご縁も感じました。

時を越えて、夢を与えてくれた南吉さん。



間瀬 富未子

武蔵野音楽大学声楽学科卒。Broadway Dance Center Theater course 修了。東宝芸能所属俳優。ファミリーコンサートを中心に幅広く活動中。乳幼児の音楽指導や、教育プログラムの開発、劇団四季や東宝ミュージカルに子役を輩出するなど、後進の育成にも力を入れ取り組む。主な出演に、ミュージカル「魔女の宅急便」絵描き

役。「赤毛のアン」「だいすけお兄さんの世界迷作劇場」全国ツアー。NHK「紅白歌合戦」テレビ朝日「ミュージックステーション」など。

短い生涯の中で、命を燃やし創り上げた作品は、今もなお私達の心に生き続け、芸術の尊さを教えてくれます。その素晴らしい受け継ぎ、今後もし子供たちと音楽を楽しみながら、美しいものを愛する心を育んでいけたらと思います。

3/21
(月・祝)

貝殻忌講演会

(第33回新美南吉顕彰講演会)

入場
無料

「雑誌『赤い鳥』に集った青年たち」——新美南吉と森三郎を中心に——

『赤い鳥』は、特に昭和期において南吉や坪田譲治など新人作家を育てる場となりました。刈谷市出身の森三郎もその一人であり、鈴木三重吉のもとで童話修行に励みながら、編集者として雑誌の終刊にも立ち会った人物です。愛読者であった幼少期から、戦後の証言者としての仕事に至るまで、『赤い鳥』と共にあったその生涯を紹介するとともに、南吉と三郎、さらには彼らと近しかった青年たちに着眼しながら、同誌がつないだ縁やその意義について考えます。

まさよ
講師 酒井 晶代 氏 (愛知淑徳大学教授)

【講師プロフィール】1966年愛知県生まれ。大阪教育大学大学院修士課程修了。愛知県立大学在学中、勝尾金弥氏の紹介により森三郎さんにインタビューする機会を得たことがきっかけとなり、大学院で「第二次『赤い鳥』と森三郎」の研究課題に取り組んだ。その後、小学校教員、財団法人大阪国際児童文学館(現・大阪国際児童文学振興財団)専門員を経て、1995年より愛知淑徳短期大学に勤務。現在は愛知淑徳大学創造表現学部で児童文学の講義や創作指導に従事。共著に『はじめて学ぶ日本児童文学史』(ミネルヴァ書房)、『文化と子ども——子どもへのアプローチ』(建帛社)、『子どもの本100問100答』(創元社)などがある。



- 時 間／14時～16時
- と ころ／雁宿ホール講堂(半田市福祉文化会館)
半田市雁宿町1-22-1(名鉄知多半田駅徒歩5分)
- 定 員／150人(予約者優先)
- 申込み／新美南吉記念館まで ☎0569-26-4888
- 主 催／新美南吉顕彰会・半田市教育委員会



3月19日(土)～22日(火)にかけて、新美南吉没後79年「貝殻忌」イベントを開催します。詳しくは左のQRコードから、記念館HPをご覧ください。



日誌抄：

十一月(霜月)

- ▼三日 第33回新美南吉童話賞最終審査会。於記念館会議室▼21日「ガリ版体験」。18人参加▼28日第178回読書会。15人参加▼同日「みんなの南吉さんストーリープロジェクト」第1弾。児童や地域住民、地元企業などが岩滑小学校北壁面の整備を行う
- 十二月(師走)
- ▼4・5日「えと人形に絵付けをしよう!」。54人参加▼18・28日「手袋を買いに」の日。280人参加▼21日 新美南吉デザインコンテスト募集開始
- 一月(睦月)
- ▼5日「令和3年度新美南吉読書感想画コンクール受賞作品展」始まる(〜2月6日)▼10日 企画展「南吉の旅」終了。会期中観覧者数7752人▼15日 企画展「榊原澄香ペーパーアート展」始まる(〜4月10日)▼29日「日本の戯曲セミナーin東海2021」で南吉特集。於芸術創造センター